

Brahms
Symphonie Nr.3 F-dur

Bruckner
Messe Nr.3 F-moll

定期演奏会

東京ニューシティ管弦楽団【第6回】

東京合唱協会【第12回】

1995年7月11日(火)PM7:00開演
北とぴあ さくらホール

主催：東京ニューシティ管弦楽団
東京合唱協会
共催：(財)北区文化振興財団
協賛：八重洲ターミナルホテル

KYRIE

Kyrie eleison. Christe eleison
Kyrie eleison.

キリエ

主、憐れみ給え。キリスト、憐れみ給え。
主、憐れみ給え。

GLORIA

Gloria in excelsis Deo. Et in terra pax
hominibus bonae voluntatis. Laudamus te.
Benedicimus te. Adoramus te. Glorificamus
te. Gratias agimus tibi propter magnam
gloriam tuam. Domine Deus, Rex coelestis,
Deus Pater omnipotens. Domine Fili
unigenite. Jesu Christe. Domine Deus,
Agnus Dei, Filius Patris.
Qui tollis peccata mundi, miserere nobis.
Qui tollis peccata mundi, suscipe
deprecationem nostram. Qui sedes ad
dexteram Patris, miserere nobis.
Quoniam tu solus Sanctus, tu solus Dominus,
tu solus Altissimus, Jesu Christe. Cum Sancto
Spiritu in gloria Dei Patris. Amen.

グローリア

天においては天主にさかえあれ。地において
は善意の人に平安あれ。われら主をたたえ、
主をあがめ、主を拝礼し、主を賛美し奉る。
主の光栄のたいなるかためつつしみて感謝し
奉る。主なる天主、天の王、全能の父なる天
主。おんひとり子なる主イエズス・キリスト。
主なる天主、天主の子羊、父の御子。
主は世の罪を除き給うにより、われらを憐れ
み給え。主は世の罪を除き給うにより、われ
らの願いを聞き入れ給え。主は父の右に座し
給うにより、われらを憐れみ給え。
そは主イエズス・キリスト、唯一の聖、唯一
の主、唯一の至高者にてましませばなり。主
は聖霊とともに天主なる父の栄光にましまし
給うなり。アーメン。

CREDO

Credo in unum Deum, Patrem
omnipotentem, factorem coeli et terrae,
visibilem omnium et invisibilem. Et in
unum Dominum Jesum Christum, Filium
Dei unigenitum. Et ex Patre natum ante
omnia saecula. Deum de Deo, lumen de
lumine, Deum verum de Deo vero.
Genitum, non factum, consubstantialem
Patri, per quem omnia facta sunt. Qui
propter nos homines et propter nostram
salutem descendit de caelis.
Et incarnatus est de Spiritu Sancto
ex Maria Virgine, et homo factus est.
Crucifixus etiam pro nobis: sub Pontio
Pilato passus et sepultus est.
Et resurrexit tertia die secundum scripturas.
Et ascendit in coelum: sedet ad dexteram
Patris. Et iterum venturus est cum gloria,
judicare vivos et mortuos: cuius regni
non erit finis. Et in Spiritum Sanctum,
Dominum, et vivificantem: qui ex Patre
Filioque procedit. Qui cum Patre et Filio
simul adoratur et conglorificatur: qui
locutus est per Prophetas. Et unam
sanctam catholicam et apostolicam
Ecclesiam. Confiteor unam baptismam
in remissionem peccatorum. Et expecto
resurrectionem mortuorum. Et vitam
venturi saeculi. Amen.

クレド

われは唯一の天主を信ず。すなわち全能の父、
天地とすべて見ゆる物と見えざる物とのつく
り主。また唯一の主イエズス・キリストを信
ず、天主のひとり子にてすべての世の前に父
より生まれ、天主よりの天主、光よりの光。
まことの天主よりまことの天主にてましまし、
つくられずして生まれ、父と一体にして、万
物これによりてつくられ、人たるわれらのた
めにまたわれらの救いのために、天より降り、
聖霊によりて処女マリアより肉体をうけて人
となり給い。
またわれらのためにポンテオ・ピラトの管下
にて苦しみをうけ、十字架につられて葬むら
れ給い、三日目に聖書にありしごとくよみが
えり給い、天に上りておん父の右に座し、し
かして生ける人と死せる人をさばかんために
光栄をおびて再び来り給い、かつその王国は
終りなかるべし。また主にして、いのちの主
なる聖霊を信ず、すなわち父および子よりい
で、父と子とともにおがみ尊(とうと)まれ
給いて予言者をもって語り給えり。また一に
して聖、公、使徒伝来なる教会を信ず。罪の
ゆるされんために一の洗礼を信ず。死したる
もののよみがえりと未来のいのちとを待ち奉
る。アーメン。

SANCTUS

Sanctus, Sanctus, Sanctus Dominus Deus
Sabaoth. Pleni sunt coeli et terra gloria tua.
Osanna in excelsis.

サンクトゥス

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、
万軍の天主なる主、主の栄えは天地にみちみ
てり。
いと高きところまでホザンナ。

BENEDICTUS

Benedictus qui venit in nomine Domini.
Osanna in excelsis.

ベネディクトゥス

主のみ名によりて来れる者は祝せられさせ給
え。いと高きところまでホザンナ。

AGNUS DEI

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:
miserere nobis.
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:
dona nobis pacem.

アニュス・デイ

世の罪を除き給う天主の子羊、
われらを憐れみ給え。
世の罪を除き給う天主の子羊、
われらに安らぎを与え給え。

昨年9月の渡辺葉子ソプラノ・リサイタル、11月から12月にかけて行われた3人のテノール、マルティヌッチ、アラガル、コスタンツォによるテノール・ガラ、そして今年2月、二期会のブッチーニ《三部作》で、はからずも東京ニューシティ管弦楽団の演奏を耳にした。いずれも、東京ニューシティ管弦楽団を「目的として出かけた訳ではない」が、彼らの存在は知らず知らずのうちに「公演の楽しみの一つ」になっていた。

そう言えば、数年前のレナータ・スコットとアルフレード・クラウス、カーティア・リッチャレリ、マリエラ・デヴィーアを支えたのもこのオーケストラだった。大変申しわけないのだが、当時は臨時編成の団体だと思いこんでいた。しかし、このアンサンブルは実績を積み重ね、知名度はともかく、演奏内容では既に認められている。

アリアのタベやオペラ公演で誠実な演奏を繰り広げ、客席に好印象を与えてきたオーケストラと実力派の若手が集ったコーラスは、19世紀後半のウィーンを軸とした味わい深いプログラムにどのような解釈を披露してくれるだろうか。

奥田佳道

ヨハネス・ブラームス (1833~1897年)

交響曲第3番 へ長調作品90

作曲:1883年の夏から秋
初演:1883年12月ウィーン

ブラームスが20年以上の歳月を費やして交響曲第1番を完成させた事実は広く知られています。“先輩”ベートーヴェンが残した9曲の交響曲——この余りにも偉大な山脈は、19世紀ドイツ・ロマン派の作曲家にとって越え難いものでした。

しかし、ドイツ・オーストリアの古典音楽を深く愛し、その継承者たることを自らに課したブラームスは熟慮と推敲を重ねた末、1876年に交響曲第1番を発表するのです。肩の荷が降りた彼は翌年の夏、伸びやかな気分に満ち溢れた第2番を作曲しています。

交響曲第3番は第2番完成から6年後の1883年、ブラームス50歳の年にライン河沿いの避暑地ヴァイスパーデンで書かれました。初演は同年12月2日、ウィーン楽友協会大ホールでハンス・リッター指揮ウィーン・フィルが行っています。当時のウィーンではブラームス派と、ワーグナーの流れを汲むブルツ

クナー派の対立が激しく、初演の評判は今一つでしたが、半年後のマイニンゲンでの演奏がこの曲の評価を決定づけました。

曲は劇的高揚と詩的静寂の対比も鮮やかな第1楽章、クラリネットの先導が牧歌的な雰囲気醸す第2楽章、夢幻的な美しさに彩られた第3楽章、やるせない(ほの暗い)情熱が疾走し、第1楽章同様、安らぎと静寂で結ばれる第4楽章から構成されています。第3楽章でチェロによって歌い出される、憧れと憂いを湛えたロマンティックな主題は、ブラームスが編み出した最も美しい旋律の一つと言えるでしょう。

第1楽章：アレグロ・コン・プリオ へ長調 6/4拍子

第2楽章：アンダンテ ハ長調 4/4拍子

第3楽章：ポコ・アレグレット ハ短調 3/8拍子

第4楽章：アレグロ へ短調へ長調 2/2拍子

INTERMISSION

アントン・ブルックナー (1824~1896年)

ミサ曲第3番 へ短調

作曲:1867~68年 第2稿1876年 第3稿1881年
初演:1872年ウィーン

習作を含め、11曲もの交響曲を手がけたアントン・ブルックナーですが、敬虔なカトリック信者だった彼が、教会音楽の分野にも多大な功績を残していることを忘れてはなりません。オーストリア上部地方(ドナウ河中流域)、リンツ近郊のサンクト・フローリアン修道院の少年聖歌隊員として音楽に親しみ、同修道院礼拝堂とリンツ大聖堂のオルガン奏者を務めたブルックナーにとって、教会音楽の作曲は日常的な営みの一つでした。リンツの楽器も素晴らしいものでしたが、何よりもサンクト・フローリアン礼拝堂が誇るパイプオルガンの荘厳な響きが、ミサ曲やモテット集、詩篇、テ・デウム、オルガン曲といった多数の教会音楽を育んだのです。このパイプオルガンの響きは、後のウィーン時代——1870年代後半から90年代——を彩る一連の交響曲にも多大な影響を与えました。

ブルックナーは充実した内容のミサ曲を3曲残しています。第1番と第3番は4人の独唱者とオルガン、オーケストラを要する

19世紀の典型的ミサ曲の形態、第2番は混声8部合唱とオーケストラを主体にしたものですが、今宵演奏される第3番へ短調は後期の交響曲にも勝るとも劣らない意欲作で、リンツ時代の最後を飾る大規模な作品としても重要です。いずれにしても、ブルックナーならではの語法(節)に満ち溢れた愛すべき音楽であることは間違いありません。彼は作品を数度に渡って改訂する“癖”をもっていました。このミサ曲にも2度、改訂の手が入っています。

第1曲「キリエ」 モデラート

第2曲「グローリア」アレグロ〜アンダンテ〜メア・アダージョ〜アレグロ

第3曲「クレド」アレグロ〜モデラート〜ミステリオス〜ラルゴ

第4曲「クレド」アレグロ〜モデラート〜アレグロ

第5曲「サンクトゥス」モデラート〜アレグロ

第6曲「ベネディクトゥス」アレグロ・モデラート〜アレグロ

第7曲「アニュス・デイ」アンダンテ〜モデラート

曲目解説 奥田佳道

